

敦煌文書における紛れ込み問題覚書

岩尾一史

はじめに

敦煌文書を扱う際、避けることができない問題の一つに、紛れ込み問題がある。敦煌莫高窟の藏經洞（第17窟）が11世紀初頭に閉められたことは現在ほぼ定説であるが¹，それにもかかわらず各地の敦煌文書コレクションのうちに、11世紀以降のものが含まれているのである。これらは何らかの理由でコレクションに紛れ込んだ文書である。本稿では、紛れ込み問題について簡単に振り返り、あわせて筆者が新たに発見した、ペリオ収集敦煌出土チベット語文書コレクションにおける紛れ込み文書一点について報告したい。

一、所藏機關における紛れ込み

筆者の考えによると、敦煌文書の紛れ込みには大きく分けて二種類ある。一つは探検家たちが藏經洞に到来する以前に発生した紛れ込み、もう一つは探検家たちが文書を獲得してから以降の過程で発生した紛れ込みである。後者の紛れ込みは、特に所藏機關において発生した。以下、行論の都合上、まずは後者の場合についてみたい。

¹藏經洞封閉の時期とその原因については多くの議論があるが、それらを詳細に紹介することは本稿の目指すところではない。議論の次第を手取り早く知るには、次の二点が参考になる。榮新江『敦煌學十八講』北京大學出版社（2001）91-95頁，Imaeda Yoshiro, “The provenance and character of the Dunhuang documents,” *The Memoirs of the Toyo Bunko*, vol. 66 (2008) 81-102頁。なお、敦煌文書のうちで最も新しい紀年は咸平五（1002）年で、ロシア藏のΦ32A や Φ32/4 がこの紀年を有する。

各國の探検隊が敦煌文書を持ち帰り、それぞれの所蔵機関に保存した後、文書を整理する過程で、保存・修復方法や整理方法の模索など幾つかの問題が起こった。特に整理の過程で文書番號が失われたり、オリジナルの文書番號が誤解されたりして紛れ込みが起こった²。以下、典型的な例を二つ挙げよう。

まずはスタイン収集敦煌漢文文書コレクション、いわゆる S. ナンバーコレクションについてみよう。当該コレクションにはスタインがトルファンやコータンで収集した文書や、甚だしきはスタインとは無関係のヘルンレ・コレクションまでが含まれている。これらスタイン漢文文書の紛れ込みについて、榮新江が次のように列挙している³。

- S.5862-5872, 6964-6972, 9437, 9464, 11585, 11606-11609, 12597⁴ :
第一・三次探検にかかるコータン、トルファン出土文書
- S.9222-9225: ヘルンレ・コレクション

またロシア科學アカデミー東洋寫本研究所サンクトペテルブルグ支部所蔵の Φ コレクションや Дх コレクションにもこの類いの紛れ込みが多数確認される。Φ とは同所所蔵漢語文書の整理にあたった K. K. ФлуГ の頭文字であり、Дх とはすなわち Дуньхуан = 「敦煌」の略語に他ならないが、「たとえば Дх のナンバーの打ってあるものでもクロトコフ (Н. Н. Кротоков), マーロフ (С. Е. Малов), コズロフ (П. К. Козлов) らがトルファンやハラ=ホトで入手したものが混じっている」⁵のである。例えば、メンシコフ (Л. Х. Меньшиков) 等編集による、いわゆるメン

²例えばスタインナンバーが複雑であったことが、整理段階での混乱を引き起こす要因になった。その邊りの事情については、Tsuguhito Takeuchi, *Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection of the British Library*, vol. 2: Descriptive Catalogue, The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko, The British Library (1998) xxv-xxvi 頁が最も詳しい。

³榮新江『敦煌學十八講』98 頁。

⁴榮新江『英國圖書館藏敦煌漢文非佛教文獻殘卷目錄』新文豐出版公司 (1994) 235 頁は 12597v を「滿文 (?) 文書」と見るが、正しくはモンゴル文である。

⁵梅村坦「敦煌探検・研究史」榎一雄 (編)『講座敦煌 1 敦煌の自然と現状』大東出版社 (1980) 205 頁。

シコフ目録⁶に、幾つかの Дх 文書が実際にはウルムチ領事クロトコフ収集文書であることが明記されている⁷。

またロシアの Дх コレクションに、カラホト出土文書が紛れ込んでいることはすでに幾度となく指摘されてきたが⁸、それら先行研究や自身の考證を踏まえ、榮新江「《俄藏敦煌文獻》中的黑水城文獻」（本稿注 7 参照）は、敦煌コレクション中のカラホト文書 200 件あまりをリストにして紹介している。

仔細にみれば、他の所藏機関においても同種の紛れ込みが見出すことができるかもしれない。しかし、今は典型的な上記二例を挙げるに止め、次にもう一つの、藏經洞の時點で發生した紛れ込み文書について考察したい。これらは、所藏機関における紛れ込みに比べて數量こそ少ないと考えられるものの、それらの來源が何處かという、より厄介な問題をはらんでいる。以下、現在確認できるものについてみてみたい。

二、藏經洞における紛れ込み

すでにスタイン、ペリオが指摘するとおり、藏經洞の發見者でありかつ管理者であった王圓籙は他の窟で發見した文書も藏經洞に入れていた⁹。

⁶Описание китайских рукописей дньхуанского фонда Института Народов Азии, 1, 1963; 2, 1967, Москва. 本稿では以下の漢譯本を用いる。孟列夫 (Л. Н. 緬希科夫) 主編、袁席箴・陳華平譯『俄藏敦煌漢文寫卷敘錄』上下卷、上海古籍出版社 (1999)。

⁷前注掲目録には「Н. Н. 克羅特科夫珍藏」とされる文書が散見される。例えば上巻 No.200, 275, 352-353 を見よ。これらはクロトコフが購入したトルファン出土文書である。他にもマローフ収集文書も確認できる (同目録上巻 No.349 等)。また榮新江「《俄藏敦煌文獻》中的黑水城文獻」『辨偽與存眞—敦煌學論集』上海古籍出版社 (2010) の 166 頁によれば、ペテロフスキー (Н. Ф. Петеровский カシュガル領事) がコータンで購入したダンダンウイリク出土文書も同コレクションに含まれる。

⁸ [俄] 孟列夫著、王克孝譯『黑城出土漢文遺書敘錄』寧夏人民出版社 (1994) (オリジナルは、Л. Н. Меньшиков, Описание китайской части коллекции из Хара-хото, Москва, 1984) はロシア藏敦煌文獻中の紛れ込みカラホト文書を挙げており、それを踏まえ榮新江「俄藏《景德傳燈錄》非敦煌寫本辨」『辨偽與存眞—敦煌學論集』163 頁 (初出：『段文傑敦煌研究五十年紀念文集』北京, 1996) が一覽にしている。關係する先行研究は榮新江「《俄藏敦煌文獻》中的黑水城文獻」(前注参照) の 166-167 頁を参照されたい。

⁹A. Stein, *Serindia: Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China*, 5 vols., Oxford University Press (1921) 828-829 頁, Paul Pelliot,

スタインが莫高窟に到達したときにはすでに紛れ込みが発生していたのである。當然ながら、各地の敦煌文書コレクションにもこれら紛れ込み文書が分散することになった。早くも 1913 年に、Denison Ross¹⁰がこの問題に対する警鐘を促している。Ross はスタイン収集ウイグル語文書 Ch. xix. 003¹¹が 1350 年の紀年をもつこと、そしてこれが明らかに藏經洞に紛れ込んだ文書であることを指摘したのである。報告を受けたスタインは当時のノートを見返し、この文書が含まれる束が堆積する文書群の上にあったことを思い出し、王はこの文書を北區の窟から持ってきたのに違いない、と述べた¹²。

さらに Róna-Tas は、スタイン文書チベット文コレクション中に、19 世紀のロシア製用紙に記されたチベット語文献が存在すること (IOL Tib J 765) を指摘した¹³。このロシア製の紙はスタイン自身が付けたサイトナンバー Ch. 73. VII, frag. B.14 をもつ。Ch. は Ch'ien-fo-tung 「千佛洞」を意味するのであるから、スタインによって藏經洞から將來されたことは間違いない。

また、IOL Tib J 502 (Ch. XL. h) は木版印刷の祈願文であるが、Jacob Dalton と Sam van Schaik は、

「このフォリオ 1 葉は木版であって、中國やモンゴル高原で刷られたものとよく似ている。明らかに敦煌の藏經洞に由來する文書ではないが、エチンゴルやカラホトでスタインが発見し、IOL Tib M という番號のもとでカタログ化されている文書に似ているようである。」¹⁴

“Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou,” *Bulletin de L'Ecole Française d'Extrême-Orient*, Tome VIII (1908) 506, 552 頁。

¹⁰Denison Ross, “The cave of the thousand Buddhas”, *Journal of the Royal Asiatic Society* (1913) 434-436 頁。

¹¹當該文書は現在 Or. 8212/109 の番號をもつ。

¹²Stein, *Serindia*, 828-829, 923 頁。また森安孝夫「ウイグル語文獻」山口瑞鳳 (編) 『講座敦煌 6 敦煌胡語文獻』大東出版社 (1985) 6 頁も参照されたい。

¹³“A brief note on the chronology of the Tun-huang collections,” *Acta Orientalia Hungaricae*, XXI (1968) 313 頁。Cf. L. de la Vallée Poussin, *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*, Oxford University Press (1962) 238 頁, No.765。

¹⁴J. Dalton and S. van Schaik, *Tibetan Tantric Manuscripts from Dunhuang: a*

と述べる。Dalton と van Schaik の指摘するとおり、本文書は本来藏經洞に含まれていたものではなかろう。しかし一方で、スタイン自身の手による Ch. 番號がつけられている以上、スタインが獲得した段階で藏經洞にあったとみなしなければならない。

以上の三例は、スタインが到着した時點で紛れ込みが発生していたことを明確に裏付ける。これらは王道士によって他の場所から莫高窟に持ち込まれたのであろう。

ペリオコレクションにも敦煌の時點での紛れ込みが存在することが確認されている。周知のとおり、ペリオは敦煌からパリのアジア協會會長のスナールに書簡を送り、文書獲得のニュースを知らせた。この書簡の抜粋に編集者注記が加えられ、本稿注9引用の Pelliot 論文として出版された。以下に引用するのは、同書簡論文に加えられた編集者注記である。

その他ペリオ氏は、【千佛洞南區とは】別の千佛洞北區においてチベット密教的裝飾を有する2窟を調べている際に、13世紀または14世紀にかかる相當數の破れた寫本と刻本を發見する幸運に恵まれた。それらは漢語、モンゴル語、チベット語、少數のブラーフミー、そして完存する數ページを含む相當數の西夏語刻本斷片であり、【西夏語刻本には】少なくとも4種類の著作が含まれる。—編集者注記¹⁵
(Pelliot 前掲論文 529 頁注 1)

このときの北區の2窟から獲得した13世紀から14世紀の文書が、後にペリオ・コレクションのうちに入ったのであった。

Descriptive Catalogue of the Stein Collection at the British Library, Brill (2006) 229-230 頁。"This single folio is a blockprint, much like those produced in China and Mongolia. It is clearly not one of the manuscripts from the Dunhuang library cave, and appears similar to the manuscripts found by Aurel Stein in Etsingol and Kharakhoto, catalogued under the shelfmark IOL Tib M."

¹⁵"D'autre part, M. Pelliot a eu la bonne fortune, en faisant dégager deux grottes tout à fait à part, au Nord du Ts'ien-fo-tong, et dont la décoration est du pur tantrisme tibétain, d'y trouver un certain nombre de manuscrits et d'imprimés déchirés du XIIIe ou XIVe siècle, - du chinois, du mongol, du tibétain, un peu de brahmī, et un certain nombre de fragments si-hia imprimés, dont quelques feuillets entiers, et qui appartiennent au moins à quatre ouvrages différents. —N. D. L. R."

ペリオが文書を獲得した2窟がペリオ編號の181, 182窟であることを確定したのは森安前掲論文(本稿注12参照)である。そしてこの指摘は、後にペリオのノートが出版されたことによって裏付けられた¹⁶。ペリオのノートによれば、181窟では漢文、モンゴル文、チベット文、ブラーフミー、西夏文書が見つかり、182窟ではチベット語寫本(故意に破られ、ある箇所は焼かれている)が見つかったという。なお、ペリオ181窟は敦煌研究院編號の464窟、ペリオ182窟は465窟にあたる¹⁷。

さて、森安氏は次のように述べる。

もし、ペリオ文書中のチベット文書あるいはモンゴル文書の中に、一八一、一八二窟出土のものがあるのなら、この推測はもはや動かしがたいものになるだろう。ところが残念ながら、二二二〇點にのぼるチベット文書は全て藏經洞出土とされているし、存在するはずのモンゴル文書はその影さえ見当たらないのである。

(森安前掲論文9頁)

そして森安氏は同論文中にて、ペリオが呼ぶ「モンゴル文書」が實はウイグル文書であることを實證したのである。結論として森安氏は次のように言う。

以上のようにみてくると、これまで藏經洞出土とみなされ、それ故に一一世紀前半以前のものと信じられてきた多くの敦煌文書の中に、實は王道士によって一八一、一八二(更にその他の洞窟?)から運び込まれたものがまぎれ込んでいる恐れが大いにあることになる。例えば、ペリオがモンゴル期の窟でも少し見つけたと言っているのに、現在では全て藏經洞出土として扱われているパリのチベット語文書などは、注意を要するものの一つである。

(森安前掲論文10-11頁)

¹⁶ *Grottes de Touen-houang: carnet de notes de Paul Pelliot: inscriptions et peintures murales*, VI, Paris (1992) 34, 38頁。

¹⁷ 敦煌莫高窟北區石窟の詳細な現状報告が、彭金章、王建軍、敦煌研究院(編)『敦煌莫高窟北區石窟』全3巻、文物出版社(2000, 2004)として出版された。464窟は同書第3巻53-108頁に、また465窟は同書第2巻222-236頁に報告が載る。

では、ペリオが持ち帰ってきたはずの 464, 465 窟出土文書をチベット語コレクションの中に見つけることができるのであろうか。このような疑問を抱きつつ、当該コレクションをマイクロフィルムなどで通覧していた筆者が偶然発見したのが、ペリオチベット語文書 Pelliot tibétain 4228 である。後述するように本文書は明らかに藏經洞由来のものではないのである。以下、簡単に紹介しよう。

三、ペリオ敦煌チベット語文書コレクションの紛れ込み:Pelliot tibétain 4228

Pelliot tibétain 4228 のサイズは縦 11.5cm, 横 11.8cm で、ほぼ正方形である。灰白色の非常に薄い低質の紙で¹⁸, ところどころ、漉き跡から破れが生じている。表にのみ文字があり、裏は白紙である。

表側の上半分にはチベット文が、下半分には有圈點の滿洲文字が、どちらも筆書きで記されている。チベット文は 4 行で、内容は誓願文の一種である。滿洲文字はチベット文の音譯である。以下、テキストとチベット語の試譯を掲げる。なお、本文書のデジタルカラー寫眞はすでに International Dunhuang Project (<http://idp.bl.uk>) にて公開されている。

チベット字

1 kye pug thur har pa ra ri bdun la sogs pa'i /
2 gnas pa'i lha gnyan 'khor tshogs thams cad bsag
3 rnal 'byor bdag cag dbon slob zhon khal bcas //
4 chos srid 'dod pa'i don kun grub bar mdzod //

滿洲字¹⁹

ji bok tor karbala riton la sak (/ sas) bi nas (/nai) bi li ni kor
sak tamson jak (/ yak) nal jor tak jak bon lob con hal ju cos
serta tot bi don gun robbar sot

¹⁸2006 年に筆者が實見した際、他の文書では特段の注意を促さなかった文書出納係が「他と比べて非常に脆い文書だから特に注意するように」とわざわざ忠告してきた。

¹⁹滿洲字の判讀に際し筑波大學教授楠木賢道氏のご教示をいただいた。記して謝す。

試譯

- 1 おお！ プクトウルハルパラの七山の
- 2 住地の神と眷屬の集團全てよ，集結せよ。
- 3 行者である我々師弟から【我々の】乗馬・馱馬 (? zhon khal) までが，
- 4 佛教政治の全ての目的が成就しますように【，と請願します】。

短文でありかつ文字も明瞭に記されているので文字の判讀自體には問題がないが，文意が必ずしもよくわからないし，何より一部不明な術語がある。特に1行目のプクトウルハルパラが何の音寫か分からない。おそらくチベット語の單語でなくて他の語の音寫であろうが，少なくとも漢語ではなさそうである。すぐ後に七山とあることから類推するに，須弥山の周りを取り圍む七山のことかもしれない。詳細については後考を俟ちたい。

一方，一見して分るとおり，滿洲文字は明らかに有圈點文字であり，かつチベット語テキストの音譯である。周知のとおり有圈點滿洲文字は17世紀前半に制定されたのであるから，本文書の紀年はそれ以降にかかることになる。またチベット文と滿洲字は明らかに同筆で記されているから，古いチベット語文書に後で滿洲字を足したということもありえない。

そもそも，記されるチベット文は，次のような特徴を有しており，その點で明らかに古チベット語と異なる。(1) 筆書きである。古代チベット帝國期，歸義軍期に書かれた所謂古チベット語は，例外を除き全てペン書きである。(2) 古チベット語に特徴的な綴りが見られない。例えば，逆さまの*i*が現れない。また，古典チベット語では *la sogs pa* と記すところを古チベット語では *la stsogs pa* と記すが，本文書では *la sogs pa* とある。

以上の點から，本文書は藏經洞が閉鎖された後，清代に作成されたものであることは明らかである。ペリオ自身が464, 465窟で採集したのか，あるいは王道士がその2窟（あるいは他の窟）から藏經洞に持ち込んだのであろう。したがって，本文書が紛れ込み文書であることは間違いない。ペリオ敦煌チベット語文書コレクションに紛れ込み文書が存在するであろうことは以前から豫想されていたものの，今回の報告で，ようやく實證されたことになる。

しかし問題は、ペリオのノートに言及される464, 465窟由来のチベット語文書の行方である。ノートによれば、465窟では故意に破られ、焼かれたチベット語寫本が見つかったということであった²⁰。Pelliot tibétain 4228が、ペリオの見つけたという寫本でないことは明らかである。では、この故意に破られ、焼かれた寫本は現在どこにあるのか。今、『敦煌莫高窟北區石窟』（本稿注17参照）の465窟調査報告をみても、それらしきチベット語文書は報告されていない。そうすると、ペリオが持ち帰ったとみるのが妥当だろう。したがってペリオコレクションの何處かにこの寫本があるはずであり、そして最も可能性が高いのはおそらくチベット語文書コレクションなのである。

要するに、ペリオ敦煌チベット語文書コレクションにはまだ464, 465窟出土の紛れ込み文書が存在する可能性が高い。同コレクションを扱う研究者は、紛れ込み文書の存在についてますます注意する必要があるだろう。

おわりに

以上、敦煌文書における紛れ込み問題について概観し、その上で筆者が見つけたペリオ・チベット語文書コレクションにおける紛れ込み文書一点Pelliot tibétain 4228を紹介した。本文書の発見によって、今まですべて藏經洞出土として扱われてきたものの紛れ込みがあるはずだと豫想されていたペリオ・チベット語文書コレクションに、やはり紛れ込み文書が存在したことを確認できたと思う。ただし、ペリオが464, 465窟で発見したというチベット語文書はいまだ発見されておらず、同コレクションを扱う際には引き続き注意が必要である。これら紛れ込み文書を突き止めることが、今後の課題である。

(作者は神戸市外國語大學客員研究員・非常勤講師)

²⁰ *Grottes de Touen-houang: carnet de notes de Paul Pelliot*, VI, 38頁。